文学者の表現
――日本人旅行者の見たイタリア――

真銅正宏

はじめに

開国以後，日本の近代において，ヨーロッパを訪れた日本人は多い。そして彼らの多くが，ロンドンやパリ，ベルリンとともに，ローマをはじめとするイタリアの諸都市をも訪れた。しかし，日本人のイタリア訪問記は，イギリスやフランス，ドイツのそれとは，明らかに印象を異にしている。ヨーロッパの中でも海に囲まれているため，時に日本との親近感を強調されるイタリアは，また一方で，キリスト教に代表される日本人には遠い文化背景をもつ代表的な国でもある。本研究は，日本の近代において，日本人旅行者の目に映じた，これらさまざまなるイタリアの印象を，総合的に探究しようとするものである。

本稿においては，これを文学者の旅行記に限り探ってみた。もちろんこれらの視線の偏りについては，他の旅行者，例えば実業家や政治家，官僚などの立場の違う人々の旅行記によって，いずれ相対化されねばなるまい。しかしながら，普段から文筆に携わる彼らの旅行記の表現は，まずその大まかな見取り図を浮かび上がらせてくれるであろう。

1.　夏目漱石

夏目漱石がロンドン留学の際に始めてヨーロッパに上陸したのはナポリであった。一九〇〇年一〇月の日記（『漱石全集』第一三巻所収，岩波書店，一九六六年）には次のように書かれている。

> 十月十七日〔水〕（略）
>
> 薄暮 Naples ニ着ス König Albert ハ今夜十時ノ発ニテ横浜ニ向フ松本亦太郎始メ四五人ノ本邦人此内ニアリ二三町ヲ隔テ丶相泊ス呼ベバ応ゼント欲ス然レドモ我船如何ナル故ニヤ上陸ヲ許サズ従ツテ友人ヲ見ルヲ得ズ残念ナリ
>
> 十月十八日〔木〕 Naples ニ上陸シテ cathedrals ヲ二ツ museum 及 Arcade Royal Palace ヲ見物ス寺院ハ頗ル壮厳ニテ立派ナル博物舘ニハ有名ナル大理石ノ彫刻無数陳列セリ且 Pompey[sic] ノ発掘物非常ニ多シ Royal Parace モ頗ル美ナリ道路ハ皆石ヲ敷キツメタリ此地ハ西洋ニ来テ始メテ上陸セル地故夫程驚キタリ

折から，横浜に帰るためにナポリに停泊中のケーニヒ・アルベルト号とすれ違った漱石は，検疫が間に合わず上陸を許されなかったため，第一高等中学校時代からの旧友で，心理学者の

松本亦太郎（一八六五～一九四三）をはじめとする日本人たちと会うことができなかった。松本は帰国後，東京帝国大学で実験心理学の講師などを務めた後，京都帝国大学の教授となり心理学講座を新設した人物である。このヨーロッパに向かう人と帰る人とのすれ違いのエピソードからも，ナポリが日本人にとって，マルセイユと同様，ヨーロッパの入り口として，その「境界」性を意識させる港であったことが窺える。

翌日，漱石は改めて，ようやくナポリに上陸することができた。これが彼のヨーロッパにおける文字どおりの第一歩である。その足で感じたのは，まず石の道路であり，これとともに大理石の彫刻にことさらに注目している事実が興味深い。一九〇〇年は一九世紀最後の年であるが，この当時の日本には，言うまでもなく，木と紙でできた家と，土煙の舞う道路がほとんどであった。そのような時代の日本人に，西洋が，先ず石のイメージをもって捉えられたのも無理はないところであろう。

さて，このあと漱石たち一行は，再び船に乗り込み，ジェノバ港で再上陸し，そこから汽車でパリに向かうことになっていた。日記によると，ここでも再び市街の立派さに驚いている。

> 十月十九日〔金〕 午後二時頃 Genoa ニ着ス丘陵ヲ負ヒテ造ラレタル立派ナル市街ナリ薄暮上陸 Grand Hotel ニ着ス宏壮ナル者ナリ生レテ始メテ斯様ナル家ニ宿セリ，食事後案内ヲ頼ミテ市中ヲ散歩ス

この「生レテ始メテ」という言葉に，図らずも，文明後進国日本の「田舎者」としての嘆きが表れているといえよう。当時の日本人が，たとえ漱石のような江戸っ子であっても，ヨーロッパに来れば「田舎者」であるという事実を，一行は，次の日ジェノバを出発する際，さらに痛切に思い知らされることとなる。以下の日記記述の通りである。

> 十月二十日〔土〕 午前八時半ノ汽車ニテ Genoa ヲ出発ス旅宿ノ馬車ニテ停車場ニ馳付タルハ立派ナリシガ場内ニテ委細方角分ラズウロ々（原）スル様洵ニ笑止ナリ漸ク汽車到着セシガ乗車セントスレバドコ〔モ〕Occupied ト喧突（原）ヲ喰ヒ途方ニ暮レタリ漸ク Cook ノ agent ヲ見出シテ之ニ英語ヲ以テ頼ミシガヤガテ乗客満員ノ為メ新列車ヲ増加シ漸ク之ニ乗込ミシガ Turin ニテ乗易ル訳故気ガ気ニアラズ

ここで，クック社のエージェントを頼っていることに注目しておきたい。このとおり，主要な観光地や易には，クック社のエージェントが配されていたようである。とにかくこうして一行は何とかパリに向かうことができた。

漱石にとって，イタリアは確かに通過点に過ぎなかったかもしれないが，その日記からはやはり，ヨーロッパを初めて目の当たりにした衝撃が窺える。ジェノバの駅でうろうろする日本人たちの姿は，あるいは日本国内において西洋を受容する際の混乱の姿にも見立てることができるかもしれない。

2. 桜井鴎村

次に，評論家で英学者また児童文学者でもあった桜井鴎村のイタリアの印象を追ってみたい。ちなみに『肉弾』（丁未出版社，一九〇六年）で有名な軍人文学者桜井忠温（ただよし）は鴎村の弟である。鴎村（彦一郎）は一九〇八年，欧州「見物」に出発した。『欧洲見物』（丁未出版社，一九〇九年）はその見聞記である。同書には大隈重信と新渡戸稲造が「序」を寄せているが，新渡戸のそれには，『欧洲見物』が「官命視察者の報告書」でもなく，また「学術研究の結果」でもない，「特殊のシステムを立てず」に行われた洋行の記録であると書かれている。鴎村はスイスから「サン・ゴツタール大隧道」を通り，ミラノに入った。このように鉄道でトンネルを抜けるルートが，当時の日本人がイタリアに入る，海路とは別のもう一つの代表的なルートであった。イタリアとスイスを鉄道で結ぶ主なルートとしては，キアッソ経由の「サン・ゴツタール大隧道」すなわちゴッタルド・トンネルのルートと，ドモドッソーラ経由の，世界最長とされるシンプロン・トンネルのルートなどがある。これらはいずれも，ミラノが起着点である。鴎村は，トンネルを抜けた後，コモ湖など，北イタリアの美しい湖水地方を列車で走り抜けている。

同書の「欧洲縦断記」の章に含まれるイタリア記事の目次は，以下のとおりである。

ミランの名画
水の都ヴエニス
ダンテが花の里（フローレンスすなわちフィレンツェ――引用者注）
羅馬の都
サン，ピエトロの大伽藍
法皇の美術殿
大帝国の廃墟
公堂の趾（フォーラム――引用者注）
コロシアム演武場
パラチンの故宮
雨のアツピア道
カラカラの浴堂
遺跡ところ〴〵
ポンペイの大雷雨
ネープルス街上
ネープルス博物館
橄欖の野

鴎村は先ずミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会で，ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」を見るために下車している。次のヴェニス行きの列車待ちの時間を利用してのことである。ここでは，「停車場構内でクツク会社の客案内から，信用の出来る案内者を世話して貰つ」ている。馬車を駆って，ここを慌ただしく訪れた。「見物料こそ高けれ，保存法が行届いてゐるとは思は

れぬ。此まゝで今後二三十年も経つと，嗚呼惜しむべし，『晩餐』の名画は全く此世より失はるゝに至らん。」と，その褪せた様子を惜しんでいる。

その後「ミラン寺」に向かっている。「世界で一二を争ふ大寺，大理石より成れるゴシツク風の尖塔の間には，二千の石像が立並びて，其結構は壮大を極めてゐる」とあることから，それがドゥオーモのものであることがわかる。時間の都合で，塔上には上っていない。

さらに，ガッレリアをもとおり，停車場に帰ると既に夜であった。ここで，「英独などとは違つて夜行汽車が何だか心元無いやうに感ぜられた」と，気弱な感想を書き付けている。イタリアの印象の多くに見られる，不潔さや治安についての不安が窺える。

ヴェニスに着いたのは夜の一二時過ぎで，実に寂しい中をゴンドラで，大運河をリアルト橋もくぐり抜け「ベルビユー，ホテル」まで向かうという心細い体験をしている。この時，鴎村をよけいにびくつかせたのは，「ベデカーの案内書」の「以太利では，田舎は猶更，市街でも夜中は危険が多いから，旅客は要慎が第一」という記事であった。このように，イタリアの不用心なイメージは，案内記などの記述の中では，早くから形成されていたようである。もちろんこれは，どこの国についても多かれ少なかれ書かれる注意事項ではある。いずれにしても，ここに見られるとおり，明治末期の日本人旅行者鴎村が頼りとしていたのは，漱石同様の「クック社」と，ガイドブック「ベデカー」であった。

ここでは，「サン，マルコ寺」「元のベニス大統領の宮殿」「歎きの橋」，それから「小蒸気」に載って「アカデミアの美術館」，さらには「サンタ，マリア寺」「サン，ジヨルジヨ寺」「リド島」などを見物した。

その後はフィレンツェに向かい，ここで一泊した後，「ウフイチ美術館」「ピチ宮附属の美術館」「アカデミーの新古美術館」などの美術館巡りと，「堂母の大寺」「サン，アポロニアの修道院」「サン，マルコの修道院」などを見学した。これら教会や修道院もまた，美術品の宝庫である。

次にローマに向かい，ここでしばらく滞在した。目次にも見られるとおり，その見物記は詳細に書き留められている。

ローマで三日を過ごした後，ナポリを訪れた。ナポリについては，「由来人気が悪いと聞いてゐたネープルスの真夜中道，」と，やはりその不安感を募らせている。翌日ポンペイを訪れている。

ナポリについては，かなり辛辣である。

> ネープルスは風光明媚の地であるが，これに住む人間には，野鄙なる伊太利根性が，公共心など云ふ安全弁を叩き破つて自由に漏洩してゐるのだ。ベテカーの案内書には，筆を極めて此市の人気を罵つてゐる，ネープルスは欧洲第一の騒々しき都会，住民は公共心などに全く無頓着で，無作法を極めてゐる，馬車屋は客を乗せておいてから，不当な賃銭を揺ることが通り者になつてゐる，朝から晩まで市中の野菜売や，果物売が大きな声をする，土地不案内な旅人と見たら，物売が取巻いて押売をする，案内者が付き纏ふ，馬車の馭者は長い鞭をパチン〳〵と鋭い音をさせる，大通では新聞売子が呶鳴る，夜になると物騒な奴がカンテラを提げて，シガーの吸端を拾つてゐる，小路では道中に屋台店を出して煮売をしてゐるなど，不快な光景を容赦なく並べ立てゝゐるが，実に其のとほりなのだ。

引用が長くなったが，ここにナポリのイメージ操作が見て取れる。これだけ書かれれば，旅行者は警戒せざるを得まい。記事はまだまだ続き，悪口は尽きない。

「ネープルス博物館」についても，「欧洲にて最も有数なるもの丶一である」と褒めながらも，その番人について，「乞食根性」と称している。

さて，鴎村は，ここからイタリア南端の港町「ブリンヂシ」に向かった。「ビー，オー会社の郵船によりて，埃及ポートサイドに渡らんが為」である。そこから日本に帰る讃岐丸に乗るというコースを採っている。鴎村にとっては，漱石とちょうど逆であるが，ナポリがヨーロッパとの別れの「境界」であった。

なお，鴎村には，この体験を活かした，『世界の衣食住』（丁未出版社・東京宝文館，一九一八年）もあり，イタリアについての記述も多く含まれている。

3. 柳沢健

大正時代のイタリア見聞記としては，詩人柳沢健に『南欧遊記』（新潮社，一九二三年）がある。柳沢は三木露風に師事し，西条八十らとも親しかった詩人であり，詩集に『果樹園』（東雲堂，一九一四年）がある。外務事務官から外交官となり，フランス大使館を皮切りに，イタリア大使館にも勤務した彼は，文学者と外交官僚との二足のわらじを履いた人物である。これら双方の面から，後には日本ペンクラブの創設にも尽力している。

『南欧遊記』の巻末の「南欧遊記の後に」によると，柳沢は，一九二〇年八月に初めてヨーロッパの土地を踏み，二ヵ月ほどパリに滞在した後，南仏やスペインの旅行にでかけ，一旦パリに戻った後，一九二一年四月半ばから五月の末にかけて，イタリア本土とシチリア島を旅行した。この旅にはパリで親しくなった画家太田三郎が同行している。彼もアルプスのシンプロン大隧道を越えてミラノに入り，ヴェローナを経てヴェニスに向かった。その後，パドヴァからフィレンツェ，ローマ，ナポリと，典型的なコースをたどっている。そこからシチリア島に渡り，再び本土に戻ってペスツム，ナポリ，ローマを訪れた。それから，アッシジ，フィレンツェと戻り，今度はピサ，ジェノバ，トリノを経て，フランスへ帰ったのである。『南欧遊記』のうち，イタリア関係の記事の目次は以下のとおりである。

伊太利遊記
　アルプスを越えつ丶
　ミラノの町
　　――スタンダールとリュイニ――
　ヴェローナ
　　――『ロミオとジュリエット』の町――
　水の都ヴェネチア
　知識と熱情の町パドーヴァ
　フィレンツェの春
　死せる町ピサ

羅馬の十日間
ナポリを中心として
アッシジの初夏
——フランチェスコとクララ——
シチリア遊記
海上
パレルモ
セジェスタの希臘殿堂
パレルモからジルジェンチへ
ジルジェンチの黄昏
古都シラキュサ
タオルミナの僧院
タオルミナからメッシナ海峡へ

一見してわかるように，シチリア島について詳しいのがこの書の特徴である。

ミラノから始まる記述は，まずスカラ座が戦争後未だに閉鎖されていることに触れる。そして「ポルヂ・ペツゾリの美術館」の「リユイニ」の作品について印象が続けられる。やはり，やや視線が特殊である。まんべん無きガイドではなく，自らの印象が最優先された文章である。

ヴェローナでは，あるカフェで，見知らぬ二人の男から話しかけられた体験を書き付けている。

> 『自分たちは日本人を見たは(ママ)のはじめてだ』とも言つた。『伊太利は日本に対して大なる同情を持つてゐる』とも言つた。それから，O氏の黒く拡げた襟飾を指しながら，『あなたがアルチストだといふことを先刻からちやんと見てゐる，それで判る』などとも言つた，そして頻りに『ホクサイ，ホクサイ，すてきです！』とも言つた。思はない土地で思はない男から我邦の北斎の名をきくのは，自分たちに深い感動を与へた。今更に芸術の持つ力の強さと広さとを思はぬわけには行かなかつた。

ヴェニスでは，「オテル・ユーロープ」に泊まった。「聖マリア・デルラ・サルーテ」寺院と，大運河の水を隔てたホテルである。

翌日，サン・マルコ広場を訪れた。サン・マルコ寺院については，次のように興味深い書き方をしている。

> あゝ，サン・マルコ。自分は，この華麗無比なビザンチン式の建築の美くしさに就いて今更らしくこゝに書き記すことは気が咎める。何百といふ本で，——否恐らく何千といふ本でそれは飽かずに書き記されて来たのだ。（さう言へば，あゝ，このヴエネチア自身だつて同じことだ。更に，伊太利自身だつて同じことだ。）あれほど几帳面であり，またあれほど独創の見方を書き記すのに遠慮なかつたゲエテの『伊太利遊記』でさへも，『既に多く物語られもし，既に多く書かれもし』てゐるからとてこのサン・マルコの美については載せ

てゐる所がないと言つていゝ。自分もまた，彼に倣はう。

そうして，「ベデツカー」から数行を引いてくるのである。この，あまりに有名なものについては，省筆するという書き方は，この『南欧遊記』全体に通じる姿勢でもある。また，「あれほど几帳面」に，「あれほど独創の見方」を記したとするゲーテの『伊太利遊記』は，あるいはそのタイトルの類似から見ても，この『南欧遊記』のモデルと見ることもできるかもしれない。

また，パリで，アンリ・ド・レニエの『ヴエネチア草紙』を買い込んで持ってきたことも書き付けている。詩をとおして街を見ているのである。

ローマに着いた時には，流石に次のようなやや大袈裟な表現を見せている。

羅馬！　羅馬！　あゝ遂々自分は羅馬へ来たのだ。

そして，自分の訳詩集『現代仏蘭西詩集』に収められたアンリ・ド・レニエの「羅馬よりの書翰」を紹介している。

次に訪れたナポリについては，次のように書いている。

『乞食の枕のナープル，マカロニと音楽との生れ出でたナープル』――二行にも足りない詩人ミユツセのこの短句のなかに，わがナポリの町の姿をありありと見ることができると思ふ。

そしてほぼ，この言葉通りの印象であると書くのである。

さて，シチリアについてであるが，パレルモを紹介するに際しても，まず，マチュー・ド・ノアイユ夫人の詩を掲げ，その街の印象を次のように書いている。

見て来たいろいろのものを今想ひ出して見ると，やはり奇異な混淆といふことになる。まつたくゲエテの言つた通りにそれは阿弗利加と亜細亜への道になつてゐるばかりではなく，又雅典への羅馬へのコンスタンチノープルへの，更にはまた巴里への道にもなつてゐるのであつた。それはあらゆる場所のまたあらゆる時代の十字路をばなしてゐるのであつた。

この錯綜した印象こそが，彼のシチリアであった。

4.　横光利一

一九三六年，横光利一はヨーロッパ旅行に出かけた。その記録は，『欧洲紀行』（創元社，一九三七年）として出版されている。横光の見たイタリアは，昭和の日本人旅行者の見たコースの一つの典型例でもあると思われる。

二月下旬に船で日本を発った横光は，一月ほどたった三月二五日，初めてのヨーロッパの風景に接し，その感慨を次のように書いている。

三月廿五日

曇。初めてヨーロツパの市街を見た。イタリーの先端，メツシナ海峡にさしかかつて，左岸にシシリイ島のメツシナ，右岸にレジア，門司，下関といふ距離だ。（略）

レジアといふ街は熱海に似てゐる。海軍の根拠地だが聖フランシスのゐさうな感じだ。段丘に橄欖の林，赤い屋根，白い砂ばかりの川。右のメツシナの横にエトナ火山が見える筈だのに雲の中に隠れてゐる。

（二行アキ）

夜の九時，海中にストロンボリの噴火山が五哩の所に見える。ときどき噴出する火がぼうと頂上で明るい。桜島のやうに全島が富士形の火山だ。ナポリへこの船の寄らぬ事が惜しい。

横光にとってのヨーロッパは，先ず，「シシリイ」の色彩としてその眼に入ってきた。橄欖は，中国語でオリーヴにこの字を当てるので，ここではおそらくオリーヴの林を指すのであろう。この木の緑色と赤い屋根と白い砂の川，あたかもイタリア国旗の三色を示すような原色のイメージと，そして対岸のイタリア本土にある海辺の火山が，横光にとっての初めてのヨーロッパの印象であった。前者は日本との相違を典型的に示したであろうが，後者は，むしろ海に接したところに多くの火山を持つ日本と共通する印象を与えたものと想像される。イタリアは，ヨーロッパではあるが，細長い海辺の国であることから，日本との類似を示し，日本人旅行者にとって，遠くて近い印象の土地であったものと想定されるのである。

また，メツシナとレジアを門司と下関に喩え，さらにレジアを熱海に言い換え，火山を桜島と富士山に喩えている。このように日本の景色に見立てるという方法は，うまく形容する言葉を持たないがゆえでもあろうが，古来，日本人がさまざまな外国文化の移入に際して行ってきた手法でもある。類似は親近感に繋がるのである。

さて，横光はこの時，イタリアには寄らず，そのまま船でマルセイユに向かい，そこからヨーロッパ巡歴を開始した。再びイタリアを見たのは，六月下旬のことである。その際，昭和という時代に特徴的なイタリア訪問のルートを用いている。空路というルートである。

横光は，ハンガリーから飛行機でアルプスを越え，ヴェニスに入ったのである。六月二六日の日記には次のように書かれている。

ベニス着。（略）――オーストリア，ハンガリイを通りベニスへ入るのは，最も良いと聞いた。私は偶然にこの通路を選んだのだが，高山と曠野ばかりの国から，急にイタリアの海へ出たのであるから印象の鮮明なのも無理はない。

ここには「海」から「鮮明」な印象を受けたことがことさらに書き留められている。考えてみれば，ヨーロッパを代表する都市である，パリやロンドン，ベルリンなどには，「海」の印象があまり感じられない。パリやロンドンは海からさほど遠いわけでもないが，海岸のイメージとは切り離されている。むしろ，セーヌ川，テムズ川，シュプレー川という，街の中心を流れる川の印象の方が強い。これに比して，南北に長いイタリアは，それぞれの都市が海に近く，

とりわけヴェニスやナポリ，ジェノバなど，海の近くであることがその独自の性格を形作っている都市が多い。しかも横光は，飛行機により，その都市の光景を空から眺めたので，より鮮烈にそのイメージが捉えられたではなかろうか。

横光は，イタリア入りした時点で既にヨーロッパを三ヵ月ほど廻ってきているので，イタリアの諸都市を見るに，日本と比較することに加えて，ヨーロッパの主要都市とも比較する視線を持ち合わせていた。例えば次の如くである。

> 六月廿六日
> （略）
> 私のホテルのローヤル・ダニエルの広間はベルサイユの宮殿よりも美しい。海は窓の傍にあり，ホテルを包んで水路が深くサンマルコの寺の裏へ廻つてゐる。サンマルコは，板垣鷹穂氏の「イタリアの寺院」の中で，三つの代表的な美しい寺の一つに上げられてゐたと思ふ。前の広場の鳩の密集してゐる様は，浅草寺の比ではない。

「板垣鷹穂氏の「イタリアの寺院」」とは，正しくは『イタリアの寺』（大鐙閣，一九二六年）で，同時に芸文書院と用美社からも出版されている。

このとおり，ベルサイユ宮殿から浅草寺まで用いて譬喩による表現を試みるのは，日本にいる，ヨーロッパを未だ見たこともない日本人読者を意識してのことであろう。そしてそれは，『イタリアの寺』という図版を含む書を示唆することにより，その検証をも読者に迫っているのかも知れない。

横光が次に訪れたのは，フィレンツェである。六月二八日の夕刻にここに移った横光は，次のような描写を試みている。

> 六月廿九日
> フロウレンスの街は丘陵に包まれた盆地にある。周囲の丘の頂上は，すべて寺院だ。緑樹豊かな中に遠望される寺院の美しさに，ともかくそこへと動かされ，タクシーをとる。イタリアの名画で，しばしば見た風景ばかりの連続である。いかなる名画も写生が基調をしてゐるのだ。擦れ違ふ婦人たちにしても，フロウレンスの婦人は，ラフアエロやチチアンの画中の人そつくりなのが多い。

このように，絵をもって形容する手法の背景には，この地で生まれたレオナルド・ダ・ヴィンチを代表とする，イタリアの画家たちの絵の重ね合わせが想像される。横光もダ・ヴィンチがこの地で生まれたことを同書の中に書き留めている。そこには，モナリザの描き手の故郷という先入観が働いている。そしてそのために，正しく絵のようなという形容で，風景描写がなされるわけである。これは読者にとって，極めて直接的に想像力による映像化を迫る手法といえよう。同じ日の日記には次の記事も見える。

> ダンテの生れた所，ダヴインチ，ボツカチオ，マキアベリ，ヂオツト，シマブエ，セリニ，

皆この街で生れてゐる。

もう一つ興味深いのは，このフィレンツェの町を，パリに類比している点である。これも六月二九日の日記記事である。

フロウレンスへ来て見て，私はパリーを一層確実に了解する事が出来たと思ふ。この地を中心として起つたイタリアのルネツサンスから百年遅れて侵入したパリーのルネツサンスは，総てフロウレンスの真似だつたのだ。しかし，十七世紀になると，早やフロウレンスはパリーの真似をせずにはゐられなかつたのだ。

このことについては，同書の「イタリア行」という文章においても書かれている。

フロウレンスの街は，丘陵に包まれた盆地である。中央を流れるアルノ河は，橋も堤もセーヌ河に似てゐる。思ふに十七世紀のパリーは，今のフロウレンスそのままと見ても良いだらう。

このように，フィレンツェはパリに見立てられることによって，ヨーロッパの都市としての風貌を鮮明にし，さらにダ・ヴィンチを初めとする天才の生まれた土地として，その他の都市との相違点，すなわち特別性を強調される。この類比と区別の手法は，メッシナ海峡にさしかかった際にも既に見られたものであるが，今度は絵画的であるという記述とともに用いられたため，パリは風景の映像化のためにも有効に機能するであろう。

続いて横光は，六月三〇日にミラノに入った。「ホテル・レヂナ」に予約しておいたのが，切符の期間が切れていて，「ホテル・マルノ」へ回されるというハプニングもあったためか，横光の見たミラノの印象はさほど良くない。

山紫水明のミラノと云ふ。然しここには，水もなければ山もないおまけに樹木もない。

フィレンツェに対しての絶賛からは想像できないほどの冷淡な描写である。フィレンツェで事実上，横光のイタリア滞在は終わっていたようである。

5. 野上弥生子

もう一人，昭和期にヨーロッパを訪れた作家に野上弥生子がいる。野上は昭和一三年の秋から翌昭和一四年の冬にかけて，外遊に出かけた。すなわち一九三八年から一九三九年にかけてのことである。その間，イタリアには，一九三八年一一月に着いてからの約一ヵ月間と，一九三九年五月と，二度訪れている。

野上弥生子『欧米の旅』上（岩波書店，一九四二年）に収められたイタリアの記事の目次は以下の通りである。

東地中海
アレクサンドリアからナポリへ
イタリア
ナポリからローマへ
ローマ
ロビラント伯爵夫人
サン・ピエトロ
大学町
花のローマ
ローマの或る日
ヴィア・フラミニア
ローマの日記から
アシジ
フィレンツェ
その一
その二
ミラノ
ヴェネツィア
シチリア
パレルモ
シラクーサ
エトナ登山

この目次からも窺えるとおり，野上もまた，シチリアについて数多くの頁を割いている。

野上は一一月の半ばに，エジプトのアレキサンドリアから，地中海を通うイタリア船「エヂェオ」に乗ってナポリに向かった。ナポリの印象は，次のようなものである。

> ナポリにはひつて行く船の上から，美しい港湾の右手の空にヴィスヴィオの噴煙を望む時，旅人はイタリアに訪ねて来た悦びを新鮮にする。

加えてこの時，野上は，「三年ぶりの息子に逢ふ二重の悦び」があったため，よけいに感動は大きかったであろう。長男でイタリア文学者の野上素一は当時ローマ大学で講師をつとめていたが，母を迎えにやってきていた。サンタ・ルチアの近く，カステル・オーヴォ（卵城）の前の海岸は，ホテルが立ち並び，多くの日本人が宿を取るところであるが，ここに宿をとっている。

> 城砦と陸地をつなぐ橋の袂から，石段を降りて行く水際の魚料理店で，私たちは久しぶりに一緒の早お昼飯を食べた。名物のブイヤベスは，魚と，黒い殻のままの貝と，四角に切つたパンをチーズで煮こんだものらしく，それを大きな皿に山ほど盛つて出す。魚で育

つた日本人には故郷の味を思ひださせるが，見たところは，粗つぽい，いかにも港町めいた料理である。ヴァイオリンとセロに合せて，三人の男がナポリの民謡をうたふ。

これは現代のナポリにも通じる風景であろう。野上はこの時，約一ヵ月ばかりをイタリアで過ごし，ヨーロッパを巡訪した後，翌年の五月に再び訪れている。その際には，シンプロン大隧道経由の列車でのイタリア入りであった。『欧米の旅』の記述には，これら二度のイタリアの印象が混在しているようである。

ローマでは長く滞在した。しかし，記述は偏っている。それには，次のような理由が語られる。

『人間は誰でも二つの故郷をもつてゐる。生れた国とローマと。』こんな諺までもつローマにも，幾ら長くゐたところでゐすぎるわけはない。しかし，それに就いて語ることは――あまり話すことが多い時には，私たちの舌は却つて重くなる。ローマの政治，ローマの宗教，ローマの美術，ローマの建築，ローマの生活。これは書いても書いても書き切れない題材で，ヨーロッパの学者や詩人がすでに書いたもので一つの図書館が出来るかも知れない。

しかし，自らの印象を偏ったものと断りながらも，次のように語っている。

ローマの公共の家やオフィスの壁には，きつと二つの肖像が掲げられてゐる。向つて右がムッソリーニ，左が皇帝ヴイットリオ・エマヌエレである。（略）

ローマの町にはこれらの二つの権威の属性が氾濫してゐる。兵隊さんと，坊さんである。

白シャツが国軍で，黒シャツがファシストの護国義勇団とだけはすぐ区別がついたが，その他のさまざまに変つた軍服や，帽子をかぶつた兵隊は，Sから何度教はつても覚えられなかつた。聯隊ごとに服装の色が変つてゐるとのことだから，お上りさんに見分けがつかないのは無理もない。オリーヴ色があり，灰がかつたのがあり，殆んど藍いろのがあり，それが打紐屋の看板のやうに，白や黄いろい紐を十筋ぐらゐも肩から胸を横ぎつて吊つたりしてゐる。娘つ子でなくとも，なんて兵隊さんは綺麗か，と眼を見張るほどの派手やかさで，お洒落の若者なら，それを着る特権をもつだけでも兵役を愉快に感じさうである。（略）

兵士が聯隊や所属部隊で軍装を異にしてゐるやうに，坊さんも国国で僧服が違つてゐる。夜の婦人服のやうに裾まである黒衣の上に，伊達巻ほどの帯を締め，それを横に長く垂らしてゐるが，その帯が緑いろであつたり，紫であつたり，紺いろであつたりする。ヴァチカンの寄宿舎で，日本からの数人の留学生に逢つたが，彼らは緋の帯であつた。

「S」とは長男素一のことであろう。そこには，このとおり，長男も生活するローマ，当たり前ながら二〇世紀の現代に活きているローマが写されている。当時，町には色彩が溢れていた。あるいは，日本人が特に，この色の視覚的効果に過敏に反応するために，このように書き留められたのかもしれない。いずれにしてもイタリアは，色彩の国としてイメージされている。先に見た，横光の緑と赤と白の印象は，イタリアの風景についてのものであったが，野上におい

ては，人々もまた色彩のイメージをもって認識されたのである。

もちろんこのような街の豊富な色彩が，明るいイメージのものばかりを示すのではないことは，いうまでもあるまい。やがて戦争は，素一をもこのイタリアから追い出すことになるであろう。いずれにしても，野上の見聞記には，「ムッソリーニ」という言葉が頻出する。特別な時代性を背負った紀行文なのである。

フィレンツェについては，次のように書いている。

> ゲーテの『イタリア紀行』によれば，彼はフィレンツェに来ると大急ぎで町を駈けめぐり，大寺院を見て，洗礼堂を拝んで，ほんの三四時間で飛びだして，さうして書いてゐる。――『ここに再び私の知らない新しい世界がひらかれてゐる。滞在したくない。』

やはり野上もまた，『イタリア紀行』をイタリア旅行の道案内にしていたようである。しかし，ゲーテとは違い，もっと丁寧にフィレンツェを見て回ってはいる。このフィレンツェについて，またも色彩に関わる，実に興味深い記述が見える。その日フィレンツェで行われたファシストの大会の参加者の黒シャツや黒スーツを見た後，鐘塔や洗礼堂など，街の建物を見た印象である。

> まるで芋ようかんだ。これが第一印象であつた。本堂も，塔も，洗礼堂も，三つながら貴重な色大理石で出来あがつてゐるのは有名であるが，目のあたりに眺めると，黒白の大理石は普通のもので，ほかの二色は赤いと云つてもくすんだ紅いろだし，緑も冴え冴えしない鈍い青葉いろで，そつくり芋ようかんの色彩であつた。似てゐるのはそれのみではなかつた。壁でも，窓でも，柱でも，横に積みあげても，竪に使つてもすべて直線的に用ゐられてゐるのが，巨大な芋ようかんを一棹づつ色どりよく並べたやうに見えた。

この見立ての是非についてはともかく，やはり色彩には敏感であったようである。

6.　ツアーという性格

日本人がイタリアを訪れるルートには，これまで見てきた例によると，大きく二つのものが多い。一つはナポリに船で入るものである。もう一つは，スイスからトンネルを抜けて列車で入るものである。もちろんその他に，フランスからジェノバに抜けるルートもあるし，昭和に入ると飛行機によって空路で入るというルートも開かれたが，多くの日本人たちが，ナポリから，あるいはミラノやベニスから旅行を始めている。

このことは，さらに次のことを示す。すなわち，多くの旅行者がいずれローマを目指すとしても，必ずといってよいほど，他の街を経由してローマにたどり着いたということである。そのため，旅行者たちのイタリアの印象は，ローマに中心化されず，むしろローマの他にどこを訪れたのかによって特徴づけられる場合が多いのである。

したがって，これまで書かれた旅行記や案内記に書き留められたイタリアのイメージは，実に多様性を示すものとなっている。この複雑なイタリア・イメージは，日本人旅行者のきまぐ

れを示すというより，イタリアという国の，ヨーロッパ諸国の中に占める特別な意味合いを反映しているものと思われる。

日本人旅行者にとって，フランスの代表的なイメージはほぼパリによって，またイギリスのイメージは同様にほぼロンドンによって形成されるのに対し，イタリアにおけるローマのイメージはさほど単純ではない。これは，多くの都市国家的王国によって出来上がった，イタリアという国のそもそもの成り立ちの特殊性を未だに反映しているためかもしれない。イタリアの諸都市は，ほぼ対等に，それぞれのイメージを日本人に与えてきた。これが，イタリア旅行の特徴的な性格をも作り上げた。その特筆すべき性格こそが，「諸都市歴訪」，いわゆるツアーというスタイルである。

フランスを訪れる際，パリだけに長期滞在するスタイルはよく見られる。しかし，ローマに長く滞在することはあっても，その際にナポリを訪れない旅客は稀である。ミラノとヴェニスとフィレンツェも同様の関係にある。

このように諸都市を歴訪するというスタイルが，忠実に，イタリア・イメージの多様性をなぞっている。多くの旅行者は，一つの国をツアーという形式で経巡るのである。

ツアーは，今でも日本人旅行客の多くが採る旅行形態である。もちろんそこには，いかに効率的に多くの場所を周り，いかに諸費用を安く抑えるか，という経済の原理も働いている。団体旅行の場合はなおさらである。

しかし，効率よく多くの場所を見て回るためには，一つの箇所でゆっくりするというもう一つの旅の楽しみを犠牲にしなければならないことはいうまでもない。そのために，多くの場所の印象が，往々にして散漫なものともなってしまうであろう。

日本人旅行者のイタリア・イメージにも，この功罪がおそらく影響しているものと思われる。彼らはイタリアの多くの都市を訪れるために，個々の都市のそれぞれについては，浅く広く触れることしか出来ない場合が多いのである。そのために，イタリアの印象は，パリやロンドンのそれと比べ，多様で複雑で単一化されないものとなり，またその分，パリやロンドンほども集約されにくいのではなかろうか。

日本人旅行者の見た「さまざまなイタリア」とは，正しく，イタリアのさまざまな都市の特徴とその歴訪によって生まれた，必然的な印象なのである。

※本稿は，二〇〇七年六月二九日（金）に立命館大学で行われた国際シンポジウム「イタリア観の一世紀――旅と知と美――」の第2セッション「イタリアをまなざす旅と美意識」で口頭発表した内容のうち，文学者を扱った部分を文章化したものである。